



其當時の血痕が残つてゐると云ふ事は示される儘に之を見たが只真黒くなつた點々に過ぎないから或は大硝石の痕跡かも知れぬけれども場所と歴史上の興味とを結びつけるには血痕として置た方が好いかも知れぬ。此懐情なる借入書が解散さるゝと彼等の一行は又もや姉妹の間に歸つて行く様子だから予はニュー・ホール氏に頼んで彼のムアリーの風をした婦人セマデルに雇つて見やうと談判をして見たが、一時間二十五法、呉れと云はれたので其法外なる高價に驚いて止めにして了つた。聞けば彼等は何處からか其服装や寶石の飾を借りて來てゐるので其方に高い損料を拂つてゐると瞭解したさうだ。之はニュー・ホール氏から後に聞いたのである。ムアリーのセマデル雇入れに就ては見事失敗したけれども予は此處に來る以前からの希望であつた獅子の庭の月夜を寫生するつもりで歸りがけに番人に相談すると夫は出家の謝絶つたプレゼントン、アービンダの來た時代などは夜中の見物も自由なうたから彼の如き名文も出來てゐるのに予が唯一の目的であつた月夜の慶室を寫させて呉れないと言へば予が此處に來たのは



單に赤毛布の見物となす了る譯だから、不充分な言葉で以て數回押返して顧んで見たけれども、僕人はどうしても許して呉れぬ、少々金を奢せして見ても又駄目であつた。予は断んな事ならマドリッドの日本公使館から紹介状を買つて來るのであつたと後悔してホテルに歸つた。ホテルに歸つてから予は此事を獨逸の畫家に話すと先生も又其希望で是は公使館から紹介状を買つて來たけれども矢張り駄目であつたとの事左すれば彼等は怪談に當む此古宮殿に、夜間外國人などを入れて何かの間違が起つては濟まないと思へてゐるのであらうか。それとも反つて妖怪が出ないとなれば土地の評判が落ちるので其神祕を保つ爲に入れないのであらうか。又は地下室や穴窟などに今でも莫大な寶が隠してあるとの迷信から、若し此等を掘出されてはならぬと云ふので絶対に夜間の見物を禁止してゐるのではなからうか。見に角子は宮殿や内庭の月夜を見る事が出來ないから初ては外廊なりとも見て置き度いと思つて日暮れから昨日の畫圖に寫生した彼の慶室門の方に



出かける事にした。

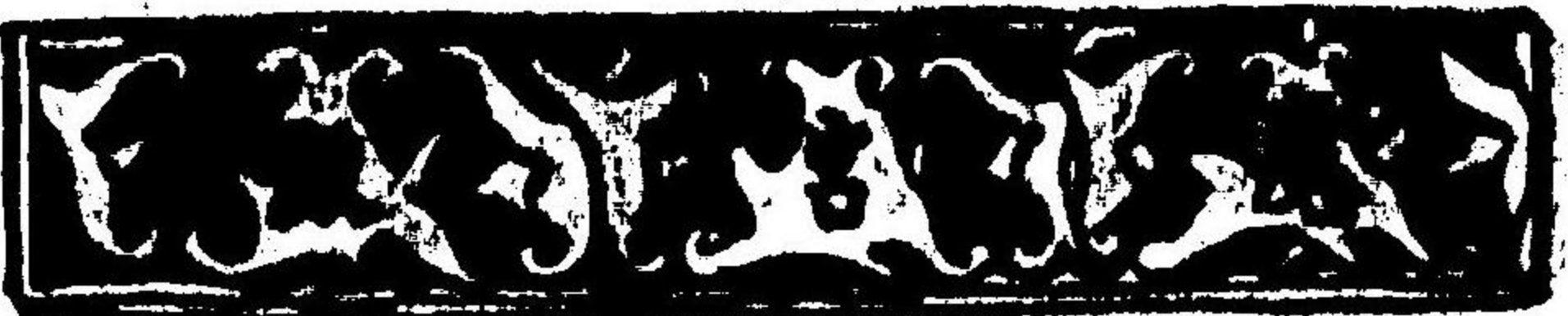
左らぬだに夢の如きアルハムプラの古宮殿は月光を浴びて宛かも魔法に魅せられた様である。今しも十六夜許りの月が天の一方に懸ると遠近に見ゆる塔や城廓の矢間などが青白く光り出して、小徑を挟んでゐる密柑やシトロンシトロンの樹は銀色の斑點を現はし、顔に聞く彼の幽霊の行列などが出て来さうである。それも予等が城壁の階を歩いて魔術門の方に出やうとする頃から折々通り響が月の面を掠めるので四邊が薄闇薄闇になつて晝間の暑さに引替へて冷氣が身に沁む様になつた。夫に晝間晝間でさへ外部から見る事の出来ぬアルハムプラの古宮殿は最早深き眠に落ちて了つて内庭や廻廊ならば蜘蛛と蟻とが其静けさを領してゐるのであらうけれど只其外廓丈を見て歩いてゐる予等には月の光りの明滅する間に眞黒の城廓が折々青白く見ゆる許りで遙か市街の方からカヌタチツトの微かな響や意味を爲さぬ人聲の様なものが反響するだけは何となく昔の騎士達が月下の舞臺に耽つてゐる様な感じを興ふるものであつた。斯くて予等は晝間晝間に來た通り魔術門の上の城壁から近道の石段を



下りかけたが此處は丁度城壁の階になつてゐる眞暗な處で足下が見別ないのには閉口した。直ぐ其眼前には晝間晝間は眞赤であつた魔術門が只青白い色の四角な塔に見えて曲り狂つた道路は充分月光を受けて只一箇の白蛇の様に走つてゐる。

予等は漸くにして下に降り又も魔術門を裏側から表に抜けると例の手首と腕の彫刻が茫然と見えて入口の正面の突當りに點じてゐる火が塔の内を寂しく照してゐる。是は後に建立した耶蘇教の聖徒の像の前に點じてゐるランプの光りで、耶蘇教徒は是に由つて魔術門の鎮護をしてゐるのだと信じて居る。

此青白い四角な門と茫然見ゆる手首や腕の彫刻と門内から洩れ、潮騒潮騒いッソンの光りと通り響の爲に明滅する月の光りと、周圍の荒涼寂寥たる光景とを見て居ると如何にも深更になるとハアプゲル王の行列が此門を通る事がある。と云ふ迷信が實現されさうで妖怪談に富むグラナダの市は總てが妖怪談的に出來てゐるのである。予は魔術門から少し離れた下の城壁の矢間の邊



に三脚を立て、此場の光景を寫生して最早夜も更けたやうだし風が強くて  
頗る寒かつたから明日是を油繪にする事にしてホテルに歸つた儘此魔術門  
の月夜と共に次の如き傳説を紹介する。

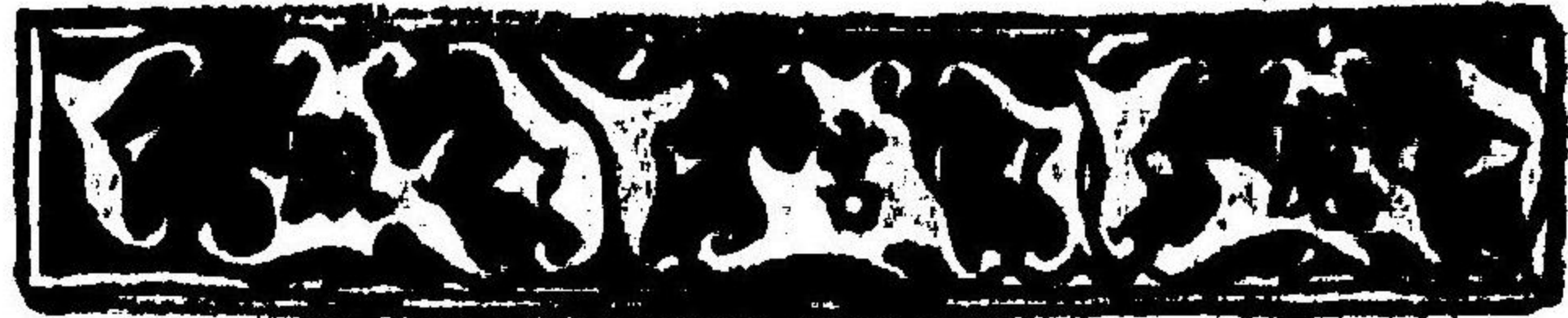
  
靈  
と  
少  
女



魔霊と少女

昔アルハムブラの克れた一室にロープナンチエズと云ふ愉快な小男が住んで居た。其仕事は宮殿の塵を掃除などする役で、魔の機に身體で活潑で終日歌を踊つてゐるのが常で、住捨てられた廢宮の内では其生命とも精神とも云ふ可きものであつた。此男は其仕事が終る毎何時も草原の中の石のベンチに腰掛けてギター樂器を彈じ西班牙の英雄英雄の事を詠じた長歌を詠よるので、此城廓を守備してゐる古兵等は此を聴くのを樂みとし、又此城廓やかな調子を奏する時は近所の少女等が來て其周圍に舞踏するのであつた。

世間の小男に能くある通りナンチエズは逞しい體格で頗る活潑で専ら其ボツケットに入れさうなお神さんを持つて居た。魔が此男は貧乏であるけれども世間普通の様に子澤山でなく唯一人の娘がある許りであつた。其娘はお近さん(ナンチエズ)と云つて十二歳になる小柄で黒髪黒ちでそして父親の機は快活な性質であつたから魔の業父は非常に之を愛して居た。お近さんは父



親が庭園で働らいてゐるときは其側で遊び廻り、木蔭に隠かけてギターを弾くときは、火に連れて舞踏し、そしてアルハムブラ宮殿附近の草叢や小徑を鹿の兒の様に駆け廻るのであつた。

今日は幸なき運命の晩でアルハムブラのお祭好きで且つ話好きの連中が老幼男女ともヘナクリフェ離宮の上なる日の山に登つて其平つたい頂上でお遊夜をするのである。幸に月の非常に好い晩で近傍の山々は紫藍色に輝き渡り圓い塔や尖塔の多いメクナゲの市は其蔭の中に横はつてペカ河は林間い森の中を流れて夢の世界の様にきらめき流れてゐる。此お遊夜の途中は山の最も高い場所を擧んで古來のムア時代から傳はつた其國の習慣なる焚火をする。又附近の田舎でも同じ様にお遊夜をして焚火をしてゐるのでペカ河の溪谷の彼地此地や群がる山の峰々にも同じ様な青い火が月光の下に燃えてゐる。

斯くて宵の間は庭園の親父のギターに合はせた華やかな舞踏で過ぎられた。此舞踏の續いてゐる間に彼のお近さんは遊び朋友の少女等と共に山の頂に



残つてゐるムア時代の遺跡の跡を遊び廻つて、空際の中で石塊などを拾つてゐると不圖黒色の玉を割んだ小さい人の手の形をした物を拾つた。此手の指は悉く握り閉いで指が硬かると其上に乗つてゐるお近さんは嬉しくて堪らや急ぎ戻つて母親に之を見せた。するとそこに居合せた群衆は一時に此問題に注意して物議らしい講釈が始まつたが或る者は之をば魔の物として喜ばないで

「そんな物は捨て、了へ、ムアの遺物だから、どんな魔法や悪戯が其内に籠つてゐるかも知れない。」

と言ふ者もあるし、又一人は

「そんな事はどうでも好い、市の寶石商に何程にか賣つて了うが好い。」

など言つて様々の議論が出たが、其時亞弗利加の戦争に行つた事のあるムア一人の様に顔色の棕黒い一人の老兵士が進み出で、物知顔に打曉めて、

「自分は野蠻なムア一人の間に居て屢々斯んな物を見た事がある。此は悪魔除けの護符でどんな呪咀でも魔術でも恐るゝ事はない物だ。魔界さんお前



の娘は偉い幸運に出會つたものだ。」

此最後の断案で昔の者は黙つて了つたから、お近の母親は之を、ボンで解つて其娘の頭にかけてやつた。

此種符問題が現はれた爲めに群衆はムーア人に關する得意の怪談を始めた。其爲に群衆は彼方退けになつて了ひ皆々地上に居つて先祖から傳はつた怪談を始め、其話の内には今現に群衆が居つてゐる、此山の頂に關するものもあつて、實際此附近は有名な妖怪の出る場所であつたのである。

其時一人の老翁が此山の中心にボアブゲール王と其朝廷の臣下とが絶て魔法に閉ぢられてゐると云ふ地下室に關して長い物語をした。

「彼所に見ゆる古跡の中にと……」

其山の遙か離れた所にある壊れた城廓や土塊の山を指して、

「彼所に真闇い客があつて地の下深く山の中心迄續いてゐる、私はグラナダ中の金を嘗與る」と言つても其中を覗くのは御免だが、昔しアルハムラに貧乏な羊飼が住んでゐて、此山に羊を追ふて来た所が其の小羊が一匹



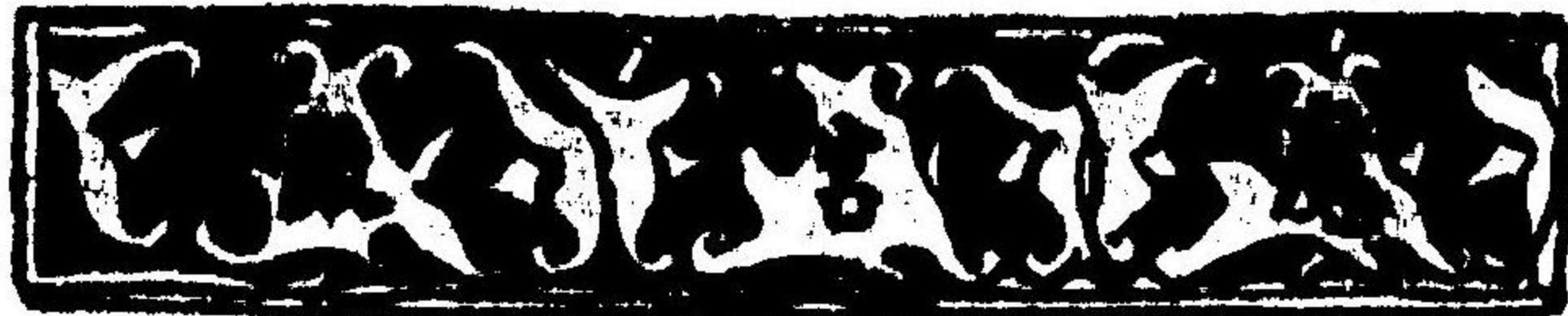
の客に陥落したので、其後を追ふて這入つて行つた、すると其羊飼は非常に驚き忙して、出て来て夫の様な事を見て来たと言つたので、人は皆々其男は氣が狂つたのだと言つてゐた、其男は夫から一兩日は客の中でムーアの幽霊に追かけられたと噂語り云つてどうしても再び其山に羊を追ふて行く事を承知しなかつたが、遂には已むを得ずに行く事になつたけれども、憐れむ可し其儘山から下りて来なかつた、其時人等は其後羊の群がムーアの古跡の邊に草を食んでゐるのを見出して其男の帽子と上衣とが客の口に在つたのを拾つたけれども、羊飼の男の行衛はさらに判らなかつた。

小さいお近さんは呼吸もせず此話に耳を傾けてゐた、お近さんは物好きの性質であるから此恐ろしい客の中を覗いて見度くて仕方がない、夫から朋友に知られない様にソツト抜出して遙か向ふの古跡の所に辿り着いて暫らく其處等邊を徘徊した末、山の嶺に當る所で其所から急にゴロー河の縁まで崖になつてゐるあたりに橋が許りの空地或は窪地と云ふ様な所を見出した、此處の真中に客の口が開いてゐる、お近さんは大膽にも客の縁まで行つて其



内を横き込んだ害の中は、毒玉の闇であつて何れも、薄暗いかならず、少女の  
身體の血は冷たくなつた。そして身を退いたが、又横きに行つては逃げ出して  
更に又横くと言つたやうにしてゐる内に所詣る恐い者見たさの餘り、遂に大  
きな石を轉がして来て、害の縁から下に墜落した。石塊は暫らくは音なくして  
落ちて行く様であつたが、或る岩角に當つたと見えて初めて、烈しく碎くる響  
きを發した。それから彼地此地と撥ね飛ばさるゝと思ほしく、雷の如き音がし  
て終に遙か、下の方の水の中に落ちたらしく、夫から再び静かになつて丁  
つた。

然るに其静かなのは永くは續かなかつた。宛も何者か、此恐ろしい害の内で  
眼を覺したやうな氣配がして、夫から蜂の巢の中の唸り聲の様な低い音が次  
第に害の中から聞えて来て、次第々々に聲高くなり遂に遠くで騒いでゐる群  
衆の人群のやうになると共に、俄かに劍戟の觸合ふ音と喇叭の響とが聞え、恰  
も或る軍隊が山の中心で出陣の用意をしてゐる様子となつた。  
少女は聲も立て得ぬ、遠驚ろいて以前の群衆の居た所に馳せ歸つたが、其所に



は父母は勿論誰一人も居ないで今にも消へんとする焚火が月の光に煙立つ  
てゐるのみである。又遠くの山々や、メダの溪間に燃へてゐた多くの焚火も、此  
時總て消へて了つて世界の萬物悉く眼に就いた様子である。少女は父母や朋  
友の名を呼んで見たが何の返事もない。仕方がないから少女は山を驅下つて  
離宮の庭園を通抜けアルハムプクに通ずる並木の小徑の所迄来てから一息  
吐かうと思つて木蔭にある石のベンチに腰を下した。此時アルハムプク宮殿  
の物見臺の鐘が十二時を告げ渡つた。夫も響が絶ゆると天地悉く静寂に歸し  
て萬物盡く眼に就いたやうだ。只草葉に隠れたる、いさゝ小川の音が微かに響  
くのみである。少女は其靜謐な空氣の爲めに覺えず、睨眼りを始めやうとして  
ゐると此時遙か向ふから何か光る物が近づき来る様子が見え出して、夫が水  
窟に近くなると驚く可し、ムア一軍人の長い行列が山の麓を下つて並木の道  
にかゝつて来るのである。其軍人の内には槍と楯とを持つてゐるものも居るし  
劍と鉞とを掲げたものも居るし、孰れも其磨上げた胸甲を月の光に輝せてゐる。  
其行列の内に一人の貴族が居て、顔には寶冠を戴き長く置れた金色の頸飾



には真珠を飾りてゐる。其馬の鞍は金糸で刺繍した真紅の天蓋で、ついで道を掃く様に覆れてゐる。然し其顔は頗る陰気で眼は絶えず地上に許り注いでゐた。其後から立派な衣服を着て種々の色布で頭を巻いた家来の行列が続いて来る。其其中に乳白色の軍馬に打掛り金剛石の輝く寶冠を戴き寶石を飾めた上衣を羽織つたゾアブゲール王が居る。お近さんは曾つて離宮の繪畫室で歴々王の肖像を見て居たので其黄色の顔に見覚えがある。此國王の行列が次第に並木の間に光り輝いて通つて行くのをお近さんは半ば驚き半ば感心して見て居た。そして王様も家来も兵隊も青白い顔をして只黙つた儘であるから人間普通のもので無くつて魔界の物であるとは知つて居るけれど然し少女は大膽に之を睨めて居た。其勇氣があつたのは勿論頭から掛けてゐる平の形をした護符があるからである。

斯くて行列は其前を通り過ぎて了つたのでお近さんは起上つて其後に限いて行く行列は正續の門即ち前に述べた魔術門の所に到着したすると門の扉は開放してあつて一人の老朽した番兵が其門の石の椅子に腰掛けてゐるか



ら幽霊の行列は自慢らしく旗幟物を翻して進んで来た。お近さんは又もや其後を追うとしたが驚いたのは其塔の地盤の下に降り入る可き穴が出来てゐた事である。お近さんは少し許り其穴を這入つて見ると岩を剝き出した足場が造つてあるから安心して進んで行くと上層は穹窿になつた通路があつて彼地此地に銀製のランプが點つて其光りと共に得も云はれぬ好い薫がするのである。其所を前進んで行くと遂に大きな廣間に出た。此所は恰も山の中心に當る所を踏いたのであつてムーア風の立派な飾が一面に施してあり天井からは水晶や銀のランプが下つて室内を照してゐる。

此廣間の一隅にある長椅子の上には亞刺比亞の服裝をした白銀の老翁が座つてコタリ／＼と睨眼りをしてゐる。其爲に手に持つてゐる杖をば今にも取落しさうである。又少し離れた所に金剛石を飾めた寶冠を戴き眼を真珠で飾めた古代の西班牙風俗の儘の美しい貴女が静かに銀製の琵琶を弾じてゐる。

小さいお近さんは此時アムハムプラで聞いた事のあるゾアブの王女と魔法





師の眼を思出した。それは王女が魔法師の爲に此山の地の下に閉籠められ魔法師は又王女の音楽の方で眠らされて居ると言ふ事である。處がお近さんは今其話に聞いた通りの事を眼の前に見るのであるから實に驚く可きである。處が更に驚く可きは美しい貴女は此魔法の爲に呪はれたる窟の内に人間の子供が這入つて来たのを見て彼方も驚いた様子で琵琶の手を停め。

「今宵は幸多き縁約の晩であつたのぢやな。」

お近、ハイ、左様であります。」

美人、それでは今晚だけは我が身の上に懸つてゐる魔法の呪ひも解くものである。お前は好い娘だから此方にお出で、恐がる事は少しも無い。我身もお前見たやうに邪蘇敷の信者だけれども魔法の爲に此處に閉籠められてゐるのだよ。お前の頸に掛けてある磁符で我身を繋いでゐる鎖を搦で、お呉れ、解うすれば我身は今晚だけは自由の身になるから。」

斯く語りながら美人は其衣服を開き其腰の隅りを着いた幅廣い純金の帯と



夫から地盤に懸いである純金の鎖とをお近さんに示した。少女は其言葉の通りに頸に掛て居た磁符を以て金の鎖を搦た所が鎖は直に地に落ちた。處が其手に眼を覺した老翁は俄かに眼を睨り出したので美人は忙て、琵琶の上に其手を遣つたから老翁は杖を手に持つたまま、又もや睨り出したのである。

美人はお近さんに向ひ、

「お前のお磁符で此老翁の持つてる杖を搦で、お呉れ。」

少女は又其通りにした所が杖は老翁の手から離れ落ちて老翁はグッスリ儘く眠つて了つた。美人は其持つて居た銀の琵琶を睨つてる老翁の頸に立掛け、其耳が聳になる程の烈しい音をさせながら、

「勢力ある音楽の神よ、此處にて夜の明けはる迄此老翁を束縛し玉へ。」

と斯つて又少女に向ひ、

「是から私の行く所に懸てお出で、解うするとお前の持つてるお磁符は總て魔法の呪ひを破るものだからアルハンブラ宮殿の昔の榮華を目前に見



る事が出来るのだよ。」

お近さんは黙つた儘に之に跟着行くと美人は地下室の口から出て魔術門の城壁を越抜け尖から城の内側にある廣場に來た。其所にはムアールの軍隊が騎兵少兵と隊伍を組んで旗を翻がへしてゐるもので一杯になつてゐる。又門の入口の所には王の親衛兵が肩て剣を抜持つた黒奴が行列してゐる。然し誰も一語をも發しないからお近さんは恐れ氣も無く案内者の後に跟着行つた。尖から自分が今日迄成長したアルハムブ宮殿の内に這入つてから少女は一冊書物を増した牙へ渡り月の光は廣間や中庭を晝の如く明らかに照し出してゐるが其光景は少女が今日迄見慣れて居たのとは大に異つてゐる。室々の壁は今迄の様に古び汚れてはゐない。そして蜘蛛の巣の代りに今はダイヤモンドの美麗な絹布が掛けてあつて壁や欄干の模様が絶て新しい光輝を放つてゐる。又廣間の内も空虛であつたのが其珠や寶石を飾めた珍奇な材料の椅子や長椅子で裝飾されて前庭や花園などの噴水も悉く水を噴出してゐる。臺所の方も今や料理の具最中である。料理人は一心不乱に皿などを拭いてゐる。



る。尖から鶏の籠や鳩の籠を賣たり焼たりして給仕は之を籠の邊に並べ立て、結構な御馳走を並べてゐる。

獅子の庭にはムアールの時代の通りの親衛兵や侍従などが群衆してゐる。そして其正面の裁判の席には廷臣に取替かれたゴアブザル王が玉座に着いて此の間丈の慕無き権力を振ふて居る。此の如く群衆した人物が肩て劍で忙がしきうなのにも拘らず人勢と足音とは少しも聞えない。只噴水の音のみが深更の夜の寂寥を破つてゐるのみである。

小さいお近さんは黙つたまゝ其案内者の行くが儘に宮殿を歩行し、廻つて壁に「マレヌの塔の下なる塔の入口に來た。此處には大理石で彫刻した二箇の女神の像が兩側に立つてゐる。

處が其女神の像の額は二つ共切を向いて居て客の内の壁に其眼を注いでゐる。魔法使ひの美人は此時歩を停めて少女を應じ、

「私は此處であなたに一つの大秘密を教へて上げやう。是はお前の信仰と勇氣に對する御褒美だよ。」



と當つて二箇の女神像を、指しながら、

「此二箇の石像はムーア王の時代の昔から地の下に埋められてゐる莫大な寶の番をしてゐるのだから、お前はお父さんに此石像が眼を替けてゐる場所を探すやうに教へて上げなさい。爾うすればお前達の家はグワナグ第一の金満家になるのだから、けれども其實を掘出す事はお護符を持つたお前の無邪氣な手より外には出来なから、お父さんに其實を奪ひ取らば許り使ふやうにして其内で私が縛られてゐる不淨な魔法が早く解けるやうに毎日の供養をして下さい」と言つて聞かせねばいけません。」

英人は斯う云つてから少女を石像の立つてゐる小さい庭園の所に導いた。此時月の光りは庭の真中にある只一つの噴水の水に映いでオレンジャーントロンの樹に北風しき波動を傳へた。英人は其時傍の月桂樹の枝を折つて少女の額に密付けながら、

「此が私がお前に教へて上げた事が總て其實であると云ふ證據なのよ。私は最早時刻が来たから元の室に歸らなければならぬから、此處限り隠れて来



ては好けないよ。若し来たたらお前さん暗い月に會はされるよ。左様なら、私が魔法の縛から早く免れるやうにお供養する事をお忘れでないよ。」

英人は背ひ終つてコマレンスの塔の下に通ずる異國な通路に進入つて了つて、其姿は見えなくなつた。

此時アルハムブラの下なるメロー河の邊の農家から微かに鶏の聲が聞えて、東の山の端には鶴の色が仄かに翳びいた。折からそよ吹く曉の風に木の葉を吹巻く様な音が廣庭や廻廊の邊りに聞えて、何處の譯も昔な執しる音と共に、獨りでに閉ぢて了つた。

お近さんは夫から引返して来て先程ボアアゲル王と其家来とで一杯になつて居た室の所に來て見ると、此幽靈の朝廷は跡なく消へて了つて寂しい月の光のみが空虛の廣間や廊下を照し出して蜘蛛の巣に張附められた汚ない古跡を示してゐる。又薄暗い物蔭には蝙蝠が我物顔に飛び交はし、籠の中には蛇が囁ぎ鳴いてゐる。

お近さんは大急ぎで父親の住んでゐる遙か離れた一室の梯子段の所に逃げ



歸つた。するとお近の父親は貧乏で盗まれる物がないから入口の戸を平常の通り明け放つた儘にしてゐたから酔つと内に這入つて自分の寢床に驚き込んで月桂樹の枝を枕の下に隠しながら其儘直ぐに睡つて了つた。朝になつて少女は昨夜の出来事を父親に話した。然し庭番の親父は之を一場の夢と見做して只打笑ふのみであつた。そして日毎の習慣通りに庭園の掃除に出かけて行つて了つたが程もあらせず彼のお近は呼吸を切らして父親の所に走つて来て、

「お父さん昨夜のムアアの伯母さんが私の頭かぶに巻いて呉れた月桂樹の枝はチヤンと此處にあるのよ。」

庭番は驚いて此を見ると月桂樹の輪は純金で其葉は悉く煤爛たるムノワルドであつた。然し彼は寶石類の事に疎いから此鉢巻きの實際の値段を計算する事は出来なかつたが娘の見た夢が普通の夢よりは何かの役に立つものである事を悟るには充分であつた。

庭番の親父は先づ第一に娘と共に其話を非常に秘密にせねばならぬ。然しな



がらお近は年にもませた側者だから此點は割合に安心であつた。次に二人で彼の大埋石の女神の石像が立つてゐる場所に行つて見ると成る程女神の顔は一様に横を向いて當然ならば入口の所を見て居なければならぬのが建物のメット奥の方の、或る同一の場所を眺めてゐる。親父は此秘密を發見したのに感心するより外はない。夫から石像と眼から其眺めて居る方角に一線を引き、壁の上に印を附けて置て何も知らぬ顔で其所から歸つた。

其日は終日心配で堪らぬから親父は彼の女神の石像が遠くから見ゆる所まで来ては誰か其秘密を悟りはしないかと見張つてゐるのであつた。若し其方角に人の足音が聞えると親父は慄ひ上つて心配をする。そして女神の顔を向き直させる事が出来て昔から其通りであつたと信じさせる事が出来るならば自分の所持品は何品でも違つて好いと思つた。

彼は心の裡にて囁語つやう。  
「若し此秘密に氣が着く野郎が居たら何でも打殺して下うんだ。斯んな人の氣の附き易い賣の賣の仕方があつたものぢやない。」



と頻りに女神像の見て居る所を氣にして若し誰か其方に近寄つて来る足音がすると彼は知らぬ顔して其所を離れる。只其附近に居る丈でも怪しく思はれはしまいかと恐れるから。

夫でも又直ぐに元の場所に歸つて遠くから石像の方を打眺め何か變つた事は起つて居ないかと檢める。而して石像の顔を見ては又もや怒り出すのである。

「矢張り彼の通りだ、あゝして見て居ては好くない所許りを矢張り眺めて居やがる。忌々しいのは奴等だ。丁度女の性質の通りを現はして居る。お懐否する口がなければ蛇度眼で以て其代りをさせやがるんだ。」

然し親父の心配も其永い日の暮るゝと共に休まつた。人の足音は最早アムムプラの反響する廣間に聞えなくなつた。斯くて最後の見物客が門口を出ると共に大きな扉はヒタと閉ざゝれて鎖を施された。此からは蝙蝠と蛙と鳥とが次第に此廢宮の夜を我物顔に占領するのである。

庭番の親父は夜更くるを待ち設けて其小娘と共に二つの女神像の在る所



に出かけて行つた。

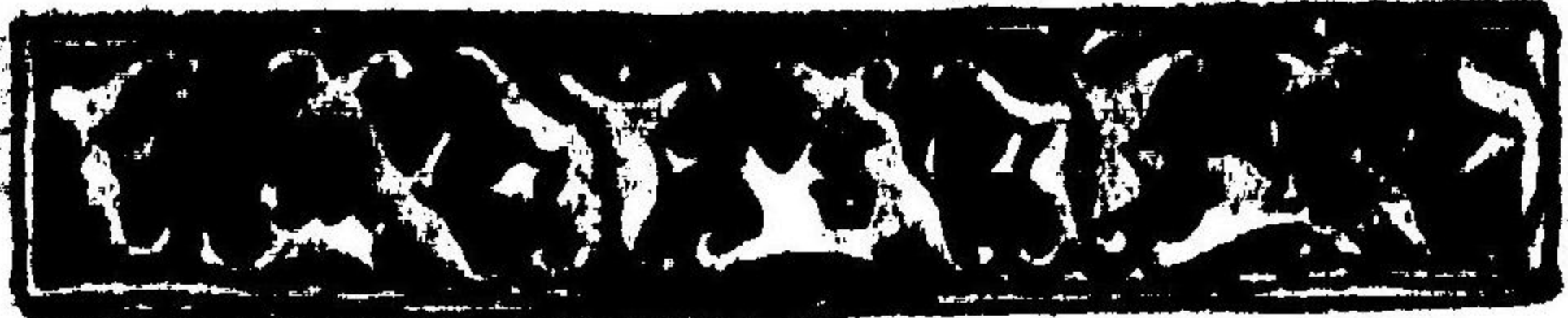
女神の石像は晝の通りに物知顔に同じ場所を眺めてゐる。親父は其中を這り抜けて吐くやう。

「御免なさい私は是から夫人方が二三百年来御苦勞なまつた見張番の役目を開眼にして上げますから。」

次に親父は壁の上に印を付けた處を毀し始めて暫らくの後に奥の方の隠れた小さい押入れに達したが、果して其内には二つの大きな陶器の壺が納めてあつた。

親父は早速之を取出さうとしたけれども壺はお近さんの無邪氣な手が掛るまでは少しも動かかなかつた。親父はお近の助けを借りて二つの壺を壁の奥から引出した。其中には豫想通りムアアの金貨と寶玉類が一杯這入つてゐる。夜の明けない内に庭番は此を自分の住家に運んで来た。

庭番の親父は俄かに富有の人となつた。然し富有になると共に今日迄は知らなかつた心配が一つ殖へて来た。夫はどうして此寶を安全に保つて行く事が



出来やうか、そして他人の縁を授けないやうに其業を遂にせうとするには  
どうすればよいか、僧又困つた事には生れて始めて盜賊の恐ろしい事が其心  
中に浮び出して来た。見れば其住居の戸締りは不用心千萬であるから俄かに  
戸口や窓に鎖を施すや、何かと大騒ぎをした末が矢張り安心して眠る事が  
出来ぬ。其平常の愉快な事動も頼しやうな歌も隣人の耳目から遠ざかつて地  
番の親父はアルハムブラの中での最も憐れな動物となつて了つた。其友人等  
は此急激な變化を見て心から之を憐むのであつたけれども次第に其交際を  
避けるやうになつた。それは魔音が益々貧乏して来たので蛇皮無心を云ひに  
来るのだと思つたからである。其位たぐひの事であるから誰とて其の心配の原因  
が富有になつたからである事は少しも覺る者が無つた。

魔音のお神さんも同様どうの心配をした。然し又其心の中では夢の様な楽しみがあつた。遂に前以て言つて置かなければならぬ事が一つある。それは魔音の親父なるものが氣配で思慮の淺い男であつたから總ての大問題の起つた場合にはお神さんは何時でも近處のお寺の布つ井し師しと云ふ頑丈な肩幅の濃い青



服の僧侶に相談するのが常であつた。實際此僧侶は地附近の善良なお神さん  
達の精神的慰安者であつた。此僧侶は又尼寺の種々な姉妹達から非常な尊敬  
を受けてゐたので、其勤行ごんぎょうの後に氣力を付けるやうにと尼寺で製造した種々  
な菓子やビスケットや藥用の飲料やらを贈つて来るのであつた。

布つ井し師しは益々其機能を活躍させた。蒸し暑い夏の日ひにアルハムブラの丘を  
登つて来る時は其油ぎつた顔は日光に照り輝いてゐるけれども其腰に巻い  
た腰こし目めのある繩帯じょうたいには其修行の嚴格なものを示してゐるので、其通行する時  
には群衆は帽を脱いで慈悲の權化ごんげの如く敬禮をする。そして其衣服から溢る、  
神慮しんりょな薫りには大抵が之を嗅ぎ廻つて犬小屋の前を通る時は蛇皮お執しゆ抄しやうを  
するのであつた。

布つ井し師しなる僧の容貌は右の通りで此人が魔音のお神さんの精神的の相談  
相手であつた。西表牙では此等の家庭の儀禮を聞く神父なる者が下等社會の  
婦人には尤も信用せられてゐるので、彼の賣の壺の一件も大々的の秘密なが  
も遂に此僧侶の耳に入事となつた。



布直井師が始めて此事を聞いた時には口と眼とを聞いたまゝ幾度も十字を切つて信て云ふには、

「我夷の娘よ、お前さんの夫は國家と寺院に向つて二重の罪を犯してゐるぞよ、お前さんの夫が斯くして手に入れた寶は國王の領分内から出たものであるから、勿論國王に屬する物である、然し一方から言へば異教徒の寶で惡魔の爪から取戻したのだから寺院に上げねばならぬのぢや、夫は異教徒ぢやが先づ月桂樹の輪を持つて來て見せなさい。」

善良なる神父が其品を見た時にユメランドの大きさと美しさに其眼は尤も輝いた。

「此品は最初に手に入つた寶だから慈善の目的の爲に喜捨すべきものである、惡僧は發願の印に今晚之を私の寺の御本尊様の前に掛けてお前さんの夫が殘りの寶を靜かに保つて居られるやうに一心不乱に祈禱して上げやう。」

善良なお前さんは天の神様も是れ許りの品物で妥協する事が出来るのを喜



んで之を僧侶に與へたから彼は月桂樹の輪を衣の下に隠して寺院の方に例の鹿爪らしい歩みを運んだ。

此時惡僧の親父が家に歸つて來たのでお前さんは此事を話すと、お前さんの様な信仰心がなくて僧侶が家庭に入込むのを密かに苦悶してゐた惡僧は非常に怒つて、

「貴様は何をするんだ、何もかも饒舌りあがつて折角の幸運を滅茶々にして了つた。」

「何ですつて、お前さんは私が心の荷物を軽くしやうと思つて神父に懺悔するのを好けないと云ふんだね。」

「否、爾うぢやない、貴様の罪を懺悔するのは勝手にするが好いだが今度の寶探しの一件は己れの罪だから貴様の知つた事ぢやない、己れは懺悔しないでも心の内で何の心配も恐れもないから貴様から其荷物を軽くして貰ふにや及ばないんだ。」

然し最早苦情を言つても違付かない、秘密は洩れて了つたので腹水壺に固ら



ヤの誓と同様、願も及ばぬのである。其内にも唯一つの希望は僧侶が誠實であつて呉れる事である。

其翌日庭番の居ない折に入口の戸を叩く者がある。其人は他に非ずして盛しげな顔をした布屋井師であつた。

「神の娘よ、愚僧は昨夜常ノランレヌの神に熱心な祈禱を捧げた所が、神は愚僧の祈を受け玉ふたぞよ、そして夜中の夢に現はれ玉ふて御告げあつたが、然し御願は甚だ難めて居らつしやつた。其御言葉に――汝は異教徒の賣を分配する事を祈るに就きても此寺院の貧しき有様を見ずや、汝は庭番の家に行き此銀殿に二箇の燭臺を備ゆる爲め我名に由つて、アアの金貨の一部分を喜捨せよと告げよ、然らば其餘は彼の安らかに樂む所の物たるべし――と仰せられたのぢや。」

お神さんは此事のお告を聞て恐ろしさに十字を切りながら、夫が賣を隠してゐる場所に行つて、アアの金貨一握を草の財布に入れて来て、僧侶に手渡しした。慈悲深き神父は其報酬として、尙も天から下さつた様な有難い言葉を度し

て、財布を袂の内に納め、兩手を胸に組合せて、左も勿體らしく其家から歸つて了つた。

庭番の親父は此二度目の奇附の事を聞いて殆んど氣を失ふ程に悲んだ。「情けない事になつた。此已ば是から先どうなるのだらう、斯うしてナビ取上げられたら終には文なしになつて乞食する許りだ。」

お神さんは之を感むるのに大に骨を折つた。そして未だ莫大な賣が獲つてゐるから、常ノランレヌの神様に彼れ許りの喜捨をするのは正當の事であつて、其儀か許りの功德のお蔭で行末が樂に暮らせるから好いではないかと慰めた。

然るも不幸にも布屋井師は澤山の貧乏な親戚と五六人の孤兒や身寄の者の世話をしてゐるので、庭番の家を訪ねて来るのが毎日の事。今日は、ドレムツクの神様の爲にと、常ノランレヌの爲めとか、聖ゼーミュスの爲とか云つて、其度毎に金貨や寶石を絞り上げて行くので、庭番は殆んど絶望になつて了つた。是はどうしても此神父の手から逃げ出さなければ、明日にある此けの神







様の日毎に喜捨をしなければならぬのだ。親父は其爲に残りの賣を納めて  
ソット夜逃げをして遠い田舎の方に隠れやうと決心した。  
此計畫の爲に魔香は一頭の強さうな驢馬を買求めて七層の地下室のものと  
云ふ塔の下の真闇な客の中に繋いで置いた。處が此場所からは深更になると  
首の無い幽霊馬が飛出して地獄の犬の群に追はれながら、グナグナの市街を  
駆け廻ると云ふ話のある所である。魔香の親父は少しも此話を信用しては居  
なかつた。然し其爲に他人が恐れを抱いて此客の内に驢馬を繋いでゐるのを  
視く者が無からうと其點を安心して居たのである。其用意が済むと親父は先  
づ其家族次けを晝の間にベガ河の畑の遠い村落迄運つて置て其所で待合は  
させる事にして自分は夜の更くるのを待つて彼の晝を塔の下の客に運  
んで行つて其處で驢馬の背に着け、夫から其客を出て密かに真闇な廣小路を  
降つて来るのであつた。



の知る所となつた。執念深い僧侶は此異教徒の賣が今や其手の届かない場所  
に運び去られやうとするので尙一度お寺の爲めと稱フランシスコの神の爲  
めに最後の攻撃を試みやうと決心した。からしてアルハムソラの鐘が深更を  
告げ渡り四鄰が静寂になつてから寺院の門から忍出で正義の門の下なる廣  
小路の縁を作つて居る書櫃と月桂樹の叢に身を隠した。斯くて更け行く夜の  
鐘を数へ物凄き鳥の鳴聲や遠より聞ゆる犬の吠聲に耳を澄してゐると遂に  
馬の蹄の響が近寄つて来た。  
真闇なる木下蔭から眺むると朧ろげながら廣小路を下つて来る一頭馬が  
見える。頑丈な僧侶は正直な魔香の小男を此處で如何に處置するかを考へて  
覺えず心の中で微笑んだ。  
布種井師は其僧衣の袂をまくりて猫が鼠を獲をする機に身縮ひをして待つ  
て居たが其餌食が眼の前に現はるゝや否や身を躍らして素より飛出し片手  
を肩に片手を尻にかけながら馬術の先生も宜しくと言ふ態度で馬の背に打  
降つて了つた。そして魔香の男に向ひ、



「どうだ、一つ騙つこをして見やうか。」

此言葉が終らぬ内に驛馬は俄かに跳ね出して後足で立ち上り或は前に掛り  
などして狂ふてゐたが遂に全速力を出して坂道を駆け下つた。僧侶は之を停め  
やうとしたけれども駄目であつた。斯くて驛馬は僧侶を乗せたまゝ岩角や草  
叢の縁なく疾風の如く駆抜けるので布織井師の僧衣はズタ／＼になつて風  
に翻り木の枝で頭を打つ。鞍で引掻くなど酷い目に會はされて何處迄も連れ  
行かれるのである。又一層恐ろしさを増す事は後から七頭の猛犬が吠え狂ふ  
て追かけて来るので、斯く悟つた時は既に遅かつた。彼は首無し馬の幽霊の上  
に乗つてゐたのだ。

此晩程首無し馬の幽霊が鬼馬に馴つた事はなかつた。又地獄の犬が烈しく吠  
えた事はなかつた。布織井師は春日にある凡ゆる神々の御名を喚へて救助を  
求め、果ては悪母マリア迄も其引合に出したけれども一つの名を喚ゆるのは  
一鞭を加ゆるものと同じで幽霊馬は人家よりも高く飛び跳るのであつた。其夜  
は終夜此通りで過ぎたから布織井師の父の身體は綿の如くなつて了つた。其内



に騎の聲が曉を報じたので幽霊馬は元來た道を引返し矢張り七頭の犬に追  
はれながら彼の塔の所に駆け戻つた。此時東の方には曙の光が輝びいたから  
幽霊馬は布織井師を空中に跳飛ばしたまゝ七頭の犬と共に真闇な霧の中に逃  
入つて了つた。其時今迄の騒ぎと反對で總て寂寥の世界となつた。

此の如き無惨な事故を神祕な僧侶に加へた例が他にあるだらうか。一人の眞  
夫は夜明けから仕事に出かけやうとして塔の麓を通ると其所の無花果の  
樹の下に不運なる布織井師が身を動かす事も口を利く事も出来ないで打倒  
れてゐるのを發見した。夫から大勢の人が集つて来て介抱しながらお寺迄紅  
いで行つたが其時の噂は神父は剛愎の爲めに殺はれて此災難に會ふたのだ  
と傳へられた。斯くて一二日経つ内に布織井師は漸く手足が動くやうになつ  
たから今迄の事を思出して肝心の驛馬に積んだ寶を取返したけれども尙以  
前に絞つて置いた丈りは貯へてゐるから夫丈でも締めやうと思つて手  
が動く様になるや否や枕の下に隠して置いた月桂樹の輪と草の財布を調べて  
見ると悲しむ可し純金の杖にメノランドを嵌めた月桂樹の輪と思つたのは



只の月桂樹の枝で草履布の中には砂や石礫が這入つてゐる許りであつた。布織井師は腹立しくて堪らないけれども此事を世間に知られて噴笑を買ふやら上位の僧侶から罰を受ける程の間拔けでは無つたから其死ぬる間際になつて導師の僧侶に其懺悔をする迄は決して此事を人に語らなかつた。庭番の親父はアルハムブラから逃亡してから長い間其行衛が判らなかつた只其隣人等は愉快な男であつたと言つて其味をしてゐたが其逃亡する少し以前から妙に陰氣臭くなつて所たのは餘程貧乏が迫つたものであらうと思像してゐたのである。

夫から数年の後庭番の友人で廢兵になつてゐる老人がマラガの市に行つた折不圖した怪我から通行の六頭立ちの馬車から轢倒された事があつた。すると馬車を停めて現はれた老翁は自から其介抱をして違つたが此假裝を着けて剣を下げた立派な騎士の風をした老紳士は誰あらう昔の庭番のロープ、ナンテエズで其時は丁度娘のお近が土地の大貴族と結婚をした披露の式日であつたのだ。



馬車には結婚の式に違なつた一行が皆乗つて居たので庭番のお紳さんも今日では麥酒樽の様に肥太つて金銀珠玉の裝飾をした服裝から指環許りの平首を現はしてゐた。少さいお近さんも立派な美人になつて公爵夫人迄は行すとも侯爵夫人と首つても差支へない様子であつた。其傍には少し瘦すの青年が合乗りをしてゐた。然し其血統は立派な西班牙の貴族で此がお近さんの婿君であつたのは無論である。

正直なるロープ、ナンテエズは富貴な爲めに昔の朋友を忘れなかつた。そして数日間彼れを養育して芝居や闘牛戲などを見物させて終に金貨の一杯返入つた大きな囊をお土産に贈り、更らに内一囊をアルハムブラの昔の仲間のお近に分配して呉れるやうにと頼んで囑託したのである。

ロープ、ナンテエズは常に此莫大な富が未遂に行つて銅山業をして居た兄弟の遺産であると信じて居たが然しながらアルハムブラの期好き連中は彼の二箇の女神像が見張番をしてゐた秘密の寶を掘り出したものだと言へてゐる。其寶こそ女神の像は今日に至る迄も其真像を同じ場所に住いでゐるの



で冒險的の旅行者をして来た隠れた寶が何處かに残つてゐるであらうと思  
 惟せらるゝのである。然し爾うも思はない道中や別して婦人の見物客などは此  
 二箇の石像をば婦人が秘窟を保ち得る事を示す不朽の記念碑であるとして  
 大なる満足を表しながら之を眺むるのである。

附  
録

魔宮殿後記



▲柘榴の都グラナダの事

グラナダとは英語のGrenade即ち柘榴  
 の事である。此附近の地形が柘榴の割れた様に二つ  
 の丘陵が廣がつてゐるのに市街が狭まつて居  
 るから起つた名ださうで、其人家を柘榴の實に  
 譬へたものである。其爲にグラナダの國旗には  
 半分開きかけた柘榴に王冠を戴かせた繪が描  
 いてある。此記號は又市街の公署の壁や城門な  
 どの上にも描いてある。此市街に連続した丘陵



の上に建てられたアルハムング城廓も又赤色の市街と云ふ意味ださうで、此丘陵の土が元來赤色であるのと城壁や塔が皆な赤色の材料で作られてゐるから爾が呼ぶのであらう。

畢竟前に述べた西班牙内地の荒涼たる風景は此地方に於ては全く一變してグワナダの附近は庭園や果樹園で以て埋められてゐる。グワナダ市の人家には各戸毎に庭園があつて、橙子、レモン、レトリオン、マートル、月桂樹其他香氣強き熱帯の草木が繁茂してゐる。而して昔のグワナダ王國の領分であつた地方は地味が非常に肥えてゐる穀類の收穫が最も豊饒である。

一説に由るとグワナダとはヘブリュー或ソイユシヤンに由つてグワナダ國も旅客の市と呼ばれたのが轉訛したので、アラビヤ人は此市街を西班牙のグマスカスと唱へて居たさうだ。而して古代に有名であつたアルピリ市は此處から四哩の距離にあつたのでグワナダは以前は之に屬して居たと云ふ事である。

グワナダの氣候の溫和な事と附近の地味に肥沃な事とは實にグマスカスに



勞績たるものでムアール人の最初に建設したコルトベの市街から東南九十哩の位置にある。又グワナダは當時では東方諸國との交通の要衝に當つて居たのださうで、西班牙南方の大貿易地として、世界各國から集り来る商賈の大集會場として四時果物の絶えざる生活の最も愉快な且つ國家の寶庫とす可き財源地として、附近の農業の最も發達した城廓の堅固なる市街として、穀類や大豆類の最も産出多き地方として、且つ絹糸及び砂糖の大産地として有名なものであつたさうだ。

此豊饒なる地味と無限の天恵なる絶好の氣候と勇敢なる亞刺比亞人の精勵なる經營に由つて、此グワナダ王國は僅かに四十哩四方許りの天地に一時は三百萬の人口を有した事がある。又附近の山脈には各種の名木や藥種の材料や貴重なる寶石類の産出が夥しかつたので、農業國としての富有なる財源と世界の大市場たる繁榮と共に、グワナダ王の富は非常なるものであつたらしい。それと絶えず隣境の耶蘇教國を侵略して來て其捕虜に課した賠償金や、採奪品などの爲に其財源は益々豊かであつたので、後のアルハムング城の如き大工

事を超えるのも容易な事であつて其故地に善美の極を盡したのも又甚しむを要せぬのである。

### ▲グラナダ市の位置

南歐西班牙及葡萄牙の半島はヒレニウス山脈の爲に一度び横断せられて更らに此を横断する三支脈を形成し、北はギャリシヤの尖角と共に太平洋に進入せる連峰となり、中部はキャスタイルの大原野に兀立するシユラ、テレドスの峻嶺となり、南は地中海岸に沿つてジプロンターに走れる連山となつてゐる。此南海岸の山脈中で海拔九千七百四十四呎の最高峰を有するシユラ、ネバダ(雪山)の連峰は予が慶富殿と共に讀者に紹介するに足る名山である。此最高峰に立てる旅者は晴天の日には北方にシユラ、マレナの峻嶺を望み南は地中海を隔て、遙かに亞弗利加の雲は遠く遠くに、有名なるアトラスの連峰を望む事が出来る。地中海を航海する船舶は半島の透明な空の中、射撃の空を負ふて浮び出でた様な無色の光りを、此千古の雲の峰に映し、その



無上の絶景としてゐる。グラナダの住民も又夏の空に現はるゝと、雲の峰其儘なる此其白の雪山を眺めて其偉大なる威化に誇つてゐるのである。否、否、其偉大を誇つてゐる許りで無い、彼等は其無限の思慮に無限の感謝を捧げてゐる。例故なれば此雪山こそ實にグラナダの氣候を清涼ならしめ其潤谷に四季の緑色を興ふるもので、南方熱帯國の都府をして温帯地方の如き愉快なる生活を送らしむる原因は即ち此峰あるが爲である。此南方熱帯の日光と雲隙少なき大空の下に温帯の植物と其緩和なる空気を興ふるものは此雪山に書成されてゐる。千古の雲の賜物である。是は夏時の熱度が高くなるに連れて其溶解する量が多くなつて、其清冽なる溪水は此附近一帯の狭谷を流れ下つて朱羅なる沃地に四季の緑を断たないのである。斯くて此雪山はグラナダの誇であると同時にアンダルシヤ州全體の誇りで、地中海の沖遙かに航海する漁夫等も其影を望んで、羨しきグラナダを讚美する嘯歌を口吟むのを羨し得ないのである。

グラナダ市とシユラ、ネバダ山との關係は實に右の如くで、又グラナダの歴史



から離るゝ事の出来ないアルハムプラ宮殿は此レニエラ、ネバダの山麓が南方に崩れて、ヘニールとゴローの兩溪流がグラナダの市外に出違つて居るのに挟まれた最後の丘陵が戦の裏の形に突出してゐる上に築かれてゐるので、アルハムプラの後景は實に此秀麗無双の名山である。

### ▲グラナダ市の興廢

グラナダ王國全盛の當時にはアルハムプラ城廓内許りでも四萬の兵士を容れて居たのださうで、グラナダ市の人口も二十五萬人に達した時があつたさうだけれども、今日では僅かに六萬人に減じ昔のグラナダ領分の人口が三千萬あつたのも今では六百六十萬人に減じてゐる。

昔のグラナダ市は前述の如く商業の發達な許りで無く當時の學藝も亦此市を開臺としたもので、其歴代の王から保護されて居た圖書館と大學校とは最も有名なものであつた。

此大學校は十一世紀の終に建てられたもので、其他最も著名な書師及び著述



家もグラナダ市に充満して居た、キャシリイ氏の記録には百二十人の宗敎家、法律家、歴史家、哲學者の姓名が殘つてゐる。此等の學者の姓名はグラナダの大學校をして其名譽を顯著ならしむるものであつた。

此文化燦爛たる小王國の歴史はゴアブアル王の代になつて全く絶滅に歸し彼の附庸たるアルハムプラ宮殿のみを其遺物として、ムアーイ民族の影は全くグラナダから絶滅してゐる。此の如き繁榮を極めた王國が其民族と共に全滅して了つた例は全く外に見る可らざる處で、ムアーイ王の繁華は實に極花一朝の榮であつた。只其遺物たるアルハムプラがある許りに絶東の遊子たる予等遂にグラナダの市に客となるので、此遺物に對して坐々に懷舊の情を精じ得なかつた。

### ▲魔宮殿建築の歴史

アルハムプラ城廓に就て讀者の概念を形成するには、グラナダ市の一端に接した戦の裏の如く長く長くなつた丘陵全體が取も直さず堅固なる城壁を築し



た一帯になつて、其内部が三區に横断されて居る事を告げねばならぬ。其西端の一區劃が城市即ち市民の住居となつて居たので、中央の一段高い所に亞利比亞宮殿即ちマハメット王の宮殿があり、又其東西に當る方に宮臣や諸役人の住居があつて寺院なども其區劃の内に建築されてゐる。畢竟此三區劃は當時の城廓建築上から割出されたもので、此城廓全體に「アルハムブラ」即ち赤色の市街と云ふ意味の名を附けられたのである。

アラナダの城は最初アルバイレンと云ふ丘陵にあつたのをマハムド一世(一〇一七—一〇七二)に至つてアルハムブラに移されたので、其間第二世、第三世と過ぎてユセフ一世の代に至り、益々アルハムブラ宮殿を完成して、マハムドの塔或はマートルの庭などを造り、此處で外國の使臣を引見し或は國家の大事を評議する事にした。此時地下に湯殿などを完成させて丘陵全體に城廓を造らし、其間に二十三ヶ所の物見臺即ち塔をも造つたのである。夫からマハムド五世に至つて宮殿中の最も華麗なる部分が附加へられて、獅子の庭なる冬の宮殿及び皇后の後宮なども出来上り、更にマートルの庭から左に降りた



所に評議室、其庭の庭園なども設けられて、ムアー技術最後の光を放つてゐるインフアンタスの塔などはマハムド七世時代に出来たのだと云ふ。

アラナダのマハメット王國が繼續してからフェルナンド王やイサベラ女皇は此亞利比亞式宮殿が大層御氣に入つて當時のアラナダ太守に命じて宮殿及び城廓の修繕を命ぜられた。其後チャールヌス五世が一千五百二十六年にアルハムブラに行啓された時、城廓内に新宮殿を建築されたので、古宮殿の大部分は其處に取壊され、且つ此ゴレックの大建築の爲に益々斷に壊れる様になつて了つた。夫に一千五百九十一年の彈藥爆發で獅子の庭なども大分破壊されたさうだが、勿論相當の修繕を加へられた。夫から一千七百十八年頃迄は全く廢墟となつて居たのを、ヒリアブ五世が自ら此處に住はるゝ事になつて、又もや繁榮の時代を來したけれども、一千八百十二年に佛國軍隊が引上ぐる事になつた時アルハムブラの城廓を破壊させて了ふ計畫であつたらしいが、西班牙の一兵卒は之を慮んで密かに烽火線を切斷して宮殿の主な部分を其處から免がれしめたとの事である。





アハムプラ宮殿保存の爲に國幣を支出さるゝに至つたのはヌルザナン  
ド七世の頃で一千八百三十年から以來、國家の保護の下に毎年五萬リヤルメ  
宛を給せらるゝ事となつたので、今日に至る迄も此マホメット王國の紀念が  
世界各國の漫遊客を引き寄せるのである。

ワレントン、アーピングの調査した記録に由るとアルハムプラの最初の建設  
者たるマハムド一世は一千百九十五年に生れたナザール家の一子で其幼時  
には名家の禮節を保つ丈りの教育を受け得られぬ程貧窮であつたと云ふ。  
然し當時の西班牙に於けるナラセン人は非常に文化の開けた人民であつて  
阿蘭の都府にも立派な學校があつたから、マハムド一世は其熏陶を受けて人  
となり、壯年に達すると共にアルロウアの太守に擧げられ其名望が國隣に冷  
ぬかつた。夫から程なく西班牙に於けるマホメット宗の主權者たるアボウ、フ  
ットの死去に際して、彼は其後繼者に選せられた。マハムド一世は此機會に乗  
じて一千二百三十八年に自らグナメに入つて王位に即き、西班牙國に於け  
るマホメット宗徒の主權を掌握するに至つた。之がナザール家がマホメット



王の位に即いた始まりで彼は此時マハムド一世と名乗つたのである。

マハムド一世は其勇武なる性質よりも財政上及び殖産工業上の智識を極度  
に發揮して、其文化を磨き財力を増進しグナメ市中の水利を便にするなど、  
精巧なる土木を起して遂にアルハムプラの如き大城郭を建設したのである。  
其爲に後世に至りマハムド王は魔術に通じ幾合術に通じて居たとの評判が  
立つた位で、其農工商に關し幾多の改良獎勵を爲した功績は非凡のものであ  
つたらしい。其爲に財帛俄かに豊富に、人民悅服して此大土工を起す事が出来  
たのである。

此偉大なる土工を起した創立者はマハムド一世であるけれども其華麗を極  
むる裝飾を完成したのはユセフ一世或はユセフ、アブ、ハヤツグと云ふ王で  
あつた。此王の即位は一千三百三十三年であつて王は其容貌が美男子と偉大  
夫の標本であつた。而して其性情は美術を愛し詩歌を愛する平和的の君主で  
あつたから、其宮殿の裝飾に東洋風の精美を盡したので、總てのグナメの人  
民之に續つて自家の庭園内にも塔や噴水やを作つて、當時の亞刺比亞詩人



をして、

「ユセフ時代のメクナダは青緑の寶石を盛つた銀盃の如きものである。」  
と謳歌せしめた位である。

此國王は實に今日迄も磨滅しない燦爛たる室内の裝飾を完全した人であつたけれども、其民族の爲には甚だ富む可きものでなかつた。其事業最期の君主として屢々戦端を開いた中に、ロッコ國王と同盟してキヤヌマイル及南牙の國王と大戦争をしてナラドの役に大敗したるが、西班牙に於けるマホメット宗徒の勢力を凋落せしめ、延びて其痕跡を絶滅せしめた一大原因であつたと云ふ。

### ▲魔宮殿建築の特色

アルハムブラ城廓内の亞刺比亞宮殿即ち予が魔宮殿として紹介した古跡の建築歴史に就ては前章に略述してある通りだが、此奇怪なる亞刺比亞式の建築に就て其特色の點を述べる事も又必要であらう。



此古宮殿は一般にカタ、レアルと呼ばるる固有物であつて、彼のアルハムブラ三區劃の一たる城市の遺跡から急に高くなつた地面の上に築かれてゐるもので、其北端に當る所は全く人工で築き上げた地盤の上に建つてゐる。而して此の亞刺比亞式建築の如く外觀は一向に凝つて居ない。加之にキヤトルヌ五世の新宮殿の爲に全く陥になつてゐるのである。

亞刺比亞式の家屋建築法は各國の古代建築と同じく外觀は至極簡單で何等の妙も無い。而して其室は總て内部の庭園に向つて開き多くの庭園と室とが種々に錯雜してゐる。此はメクナダ時代の王が次第に宮殿を建て續けて、一つ一つに庭園を作り又各別に入口を徹らへたので尙複雑したものとなつてゐるのである。

西班牙に於けるムアールの建築は之を三期に分けて見る事が出来る。其第一期はコルドバの大寺院でムアールの技術が古來の傳統範圍内に在つて、南バイザンチン勢力の下に支配されて居るのを示してゐる。次にセビールの宮殿の如きは其第二期に屬するもので、是に始めてムアール人獨特の技術を創設しやう



としてゐるのが見える。此計畫は第三期たるアルハムヅラの建築で完成されてゐるのである。此第三期に於てムーア人の天才は遺憾なく發揮された。此建築に費した材料は餘り高價では無い。其材料は主に木材と石膏で無論堅固な物でなく時としては只間に合せの模倣化しをしてゐる所もある。然し其建築法は全く當時の技師獨得の秘法に由つたもので決して之を他に傳へなかつた。此亞刺比亞建築法は全く上古の技術を復舊せしむる爲にしたものであると云つても好い。其華奢な大理石の柱の上に土工を施した層模を載せた所は實にタントの支柱を模したものである。而して此層模裏に當る天井に燦爛たる亞刺比亞模様の彫刻を施したのは、タントの内側に彫幕を施した時代の東洋式織物の模様に擬したので、其天井を奇妙な蜂の巢形に造つた所丈りが何等の創意に出るものらしい。而して此を支える物が見えない様にして階段を横ひ模を重ね上げたのは、美術家の豊富なる考案よりも精確なる数學家の計算に取つたものらしい。ムーアの美術家は又此天井や壁などに無闇と亞刺比亞式の繪畫で以て模様を描いてゐる。而して草花や木の葉などの形を奇妙



に思括させて千差萬別の状態を現はして居るけれども、動物の形を石膏で現はす事は全く亞刺比亞人の頭腦に無かつたらしい。又壁の空間などには亞刺比亞文字の詩句が澤山に刺んである。之を主として、ハムド五世の作に係るものださうな。

アルハムヅラに始めて来た見物客は勢頭第一に失望する。是は此建築が如何に破壊せられ且つ如何に修繕されたかを知らぬ爲めである。見物客は先づ最初の石膏細工が如何なる色彩であつたかを想像しなければならぬ。之は近く見れば其意匠の複雑して居るのに見惚れ遠くから見れば其色彩の調和に氣持の好い感じを催さしむるもので、此宮殿全體を見るに當つても今日は乾燥して居る泉水には清冽の水を滴へ噴水は盛んに玉露を吹いて、半分は室半分は押込みの機になつた床敷には涙平な模様の露幕が懸つて、座敷の燈火は燦爛たる光線を放ち、正徳の間の天井畫に見る通りの種々なる人物が此内に活動して居た當時の事を想像して見なければならぬ。又見物客は窓の外を眺めて其天竺の景物が如何に室内の裝飾と調和してゐるかを見ねばならぬ。故に



只速りとする許りならば一時間も費せば宮殿内の各處を見て了りければ  
も飽く見やうとすれば数週間かゝつても尙充分で無いのである。(天尾)

附  
録  
終

著 作 權 所 有

明治四十三年三月二十日印刷  
明治四十三年三月二十日發行

著 者 青 田 博

發行者 大橋新太郎

印刷者 水谷欣長

印刷所 博文館印刷部  
東京市日本橋區本町三丁目

發 行 所

(東京市日本橋區本町三丁目)

博 文 館

東京市日本橋區本町三丁目  
電話 本局二六二〇番

定價 九拾圓  
定價 九拾圓

著遺人山葉紅崎尾故  
輯共君案思橋石君波小谷巖

紅葉全集

全部六册 正價別金壹圓八拾錢 全部金拾圓

正價別金壹圓八拾錢 全部金拾圓

第一卷 ○色紙繪 ○新橋花鳥 ○南無阿彌陀佛 ○鳥の籠 ○夏夜 ○新色繪 ○七十二文命  
の安寝 ○風情 ○巴波川 ○結華 ○此の心 ○鳥屋屋 ○文なごし ○わかれ歌 ○  
二人ひく助 ○二人女房

第二卷 ○加藤統 ○むき玉子 ○夏小袖 ○おぼろ船 ○あさひのた ○朝の別

第三卷 ○三人囃 ○男こゝろ ○時時時 ○情風児 ○心の籠 ○むらさき

第四卷 ○鳥の女 ○鳥料理 ○浄書 ○青菊 ○不月不晴 ○三國圖 ○浮木丸 ○八重

第五卷 ○多情多恨 ○平扇の玉琴 ○安知歌 ○秋林 ○華社片

第六卷 ○金色夜叉前編 ○金色夜叉中編 ○金色夜叉後編 ○金色夜叉又 ○新編  
金色夜叉 ○阿彌陀佛 ○紅葉山人傳 ○紅葉作年表

行發館文博

著遺君山眉上川故  
訂校君案思橋石君波小谷巖

眉山全集



博文館發行  
東京市日本橋區本町

全四册 正價別金壹圓八拾錢 全部金拾圓

第一卷 ○雪折竹 ○風流狂言 ○お菊 ○有明 ○青雲 ○大まかづ ○書院官 ○うらむらむ ○美子 ○鳥

第二卷 ○梅紅葉 ○た巻 ○野人 ○行脚 ○二取 ○一軒 ○輪 ○三鎮士

第三卷 ○春宵 ○娘の恨 ○落葉 ○小水折 ○小袖 ○春宵 ○才 ○三入男 ○浮城 ○西平 ○凡

第四卷 ○朝東 ○春の朝 ○春の朝 ○春の朝 ○一更天 ○夏山 ○平紅雲

幽艶にして清麗なる川山氏の筆は、其に明治の華文なり。況んや其想、おのづから當  
代の重きをなして、而も遠慮として追らざる所、我文壇の重鎮たり。今や斯人なくし  
て其著作獨り金五板の輝を傳ふ。  
本書に収めたる諸篇は、孰れも當世文壇をして、眉山氏が絶倫の盛名を擅にせしめた  
るもの。實に是れ我讀書界に於ける珍璧にして、而してまた明治文壇異彩ある大作  
が面影なり。

明治文壇の偉觀と壯觀とは收めて此大集にあり

# 名家小説

可憐編  
可憐編

## 露伴叢書 後前編

神田南洲先生著全集全十巻入  
正金貳圓 小色紙一巻附

容内編前  
○二日物語  
○夜の雪  
○俵の舟  
○林の舟  
○休米舟  
○海米舟  
○ひげ米舟

○新學士  
○送舟  
○和舟  
○川舟  
○大舟  
○緑舟

○夢がたり  
○夢ははり  
○夢ははり  
○伊能忠敬  
○伊能忠敬  
○伊能忠敬

○地獄探日記  
○元禄時代の雜劇  
○折々草  
○折々草  
○折々草

可憐編  
可憐編

## 澁柿叢書

神田南洲先生著全集全十巻入  
正金貳圓 小色紙一巻附

容内編後  
○久松義典  
○三島重豪  
○新島襄  
○新島襄  
○新島襄

○自山行  
○自山行  
○自山行

○當世外道の面  
○當世外道の面  
○當世外道の面

○針じ文  
○冷干水  
○ひと草  
○ひと草  
○ひと草

# 説文庫

博文館  
發行

第四編  
第四編

## 柳浪叢書 後前編

神田南洲先生著全集全十巻入  
正金貳圓 小色紙一巻附

容内  
○多野左衛門  
○片桐且元  
○男の面  
○大風乾之介  
○大風乾之介

○長野もなや  
○由井正雪  
○由井正雪  
○由井正雪

○不老の術  
○大石内蔵之助  
○大石内蔵之助  
○大石内蔵之助

○五月人形  
○天野屋  
○天野屋  
○天野屋

容内編前  
○おもかげ橋  
○骨心  
○骨心  
○骨心

○狂言娘  
○狂言娘  
○狂言娘

○都の夏  
○都の夏  
○都の夏

○幼時の夜路  
○幼時の夜路  
○幼時の夜路

装釘の瑰麗は架上の群書中に燦然と光輝を放つ

以下名家の傑作集を逐次刊行す

島崎藤村著

小説 藤村集

内容  
 ○夏香 ○一休 ○群衆 ○土産 ○遊藝  
 ○逆木 ○伯爵夫人 ○青年 ○雜貨店 ○孝公人  
 ○收復 ○旅 ○苦しみ人々 ○弟子 ○河岸の家  
 ○文學を愛好する士女諸君の愛好を待つ

全一冊 四六判 紙装  
 本 金七拾五錢  
 郵 金八  
 正 金八  
 校 金八

—(行發館文博)—

田村松魚著

北米の花

著者は今の青年文中一他の風骨を有す 三十六年北米の野に遊び 爾來六年間の異國生活に  
 米大陸の災禍に放浪し 研鑽琢磨功を積んで後歸朝 今東京都の文壇に立つ此書は即ち 著者  
 が新らしい生涯と新らしい趣味とを世に公にせる其第一聲なりとす中  
 最じん所の長短篇小説隨筆隨筆北米の花の美と其艶麗を競ふ

全一冊 四六判 紙装  
 正 金壹圓拾錢  
 郵 金八

—(行發館文博)—

土肥春曙君譯

新社會劇

本書は「新社會劇」三巻、(三巻) 三巻、(三巻) 三巻、(三巻) 三巻の四巻を含む、今回新設された文  
 藝學會編輯研究所の教科書として用ゐらるるもの  
 本書は著者が多年の研究の結晶により成に實踐に達せしむべく、少なからざる苦心と用意とな  
 以て執筆せらるるもの  
 本書は新社會劇を研究せんと欲する新學者に取つて唯一の精神補たるを以て、苟も劇に違  
 る者は、本書に依りて私演劇を試み見よ。四巻の趣味を會得すると同時に、我が同胞の情  
 境に實するべき情熱の鼓吹は自ら其間に啓明せらるべし

全一冊 四六判 紙装  
 正 金六拾五錢  
 郵 金八

—(行發館文博)—

相馬御風君譯

短篇ゴロリキ一集

茲に譯出せられたる六篇は、ゴロリキが最も得意とする短劇中、更に最も傑出せるものを選び  
 たるものなれば人一度之れを讀みかんが大膽活潑なる情勢を以つて成る 歐洲文壇の新  
 作風とかの最も男性的力に充つと譯せられたるゴロリキが崇高な  
 る新人生觀とを窺ひ知るを得べし

全一冊 四六判 紙装  
 正 金四拾五錢  
 郵 金六

七

山崎紫紅君新作脚本

史劇 十二曲

最近二年間に於ける著作勢作の結晶物なり。上場せられて都下の劇壇を賑はしたる

歌舞伎物語、その夜の石田、亂れ笹、松一木、信玄最後、當流鉢木、破戒曾我、外明智光秀、戀の洞、三七信孝、他、その二篇

を収めたり。著者の脚本は所謂机上の臺帳にあらず。如かもまた清新の氣に富みて通俗の趣なし。劇に忠ある讀者一讀を乞ふ。

博文館

小説 小栗風雲外一十卷

二十人集

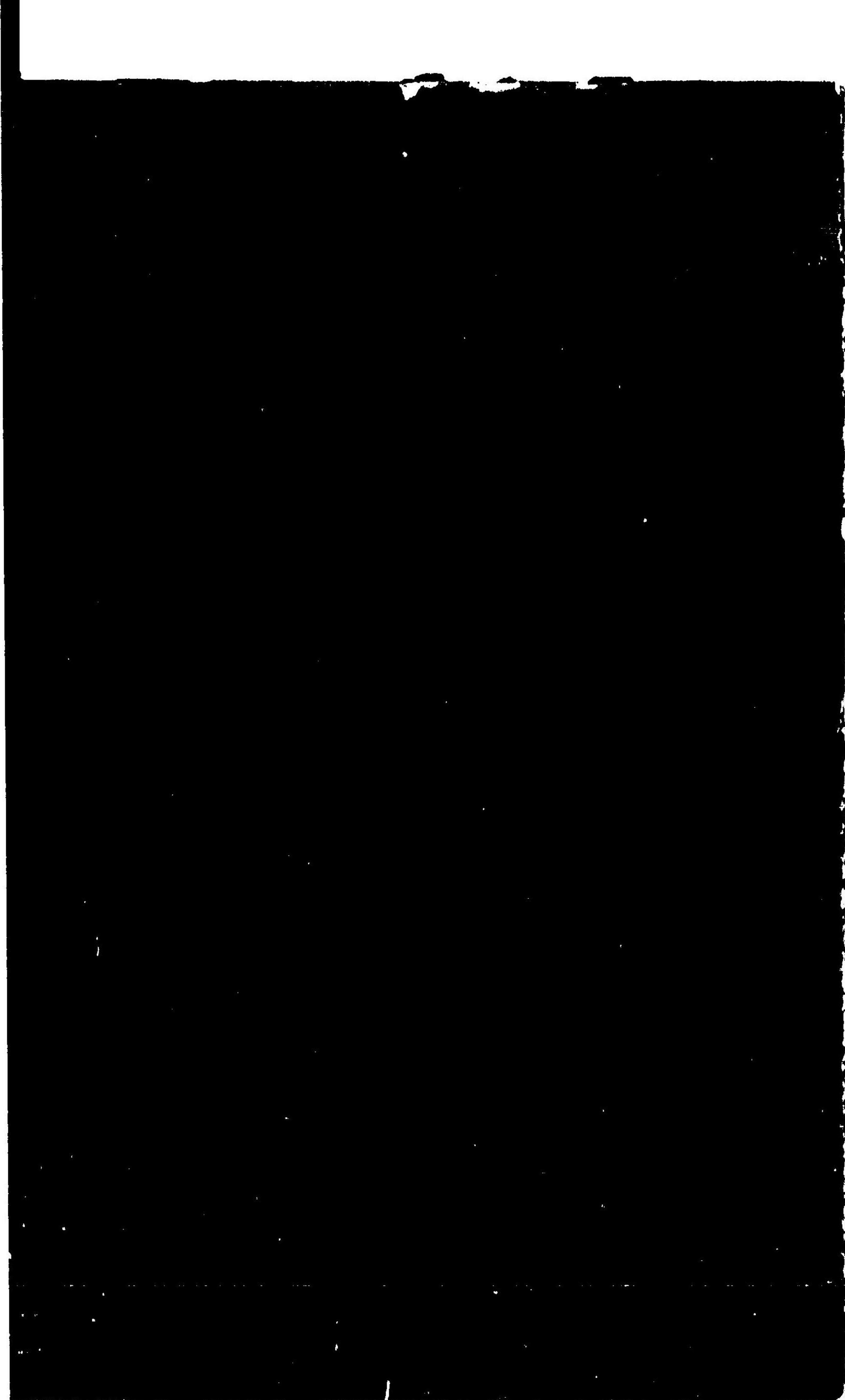
執筆せる處のものは皆之れ當代の名士、收むる處、十二篇、各々會心の佳什ならざるはなく、紅雲、金碧相映して、當に是れ名花十二卷の妍を脱ひ、麗を脱はすにも似たらんか、愛に凝望して江湖の清麗を供つ。

（全二十卷）

全一冊 中判 上製 函裝  
正金 九拾五錢  
函裝 全八冊



328  
208



328

208

026862-000-2

328-208

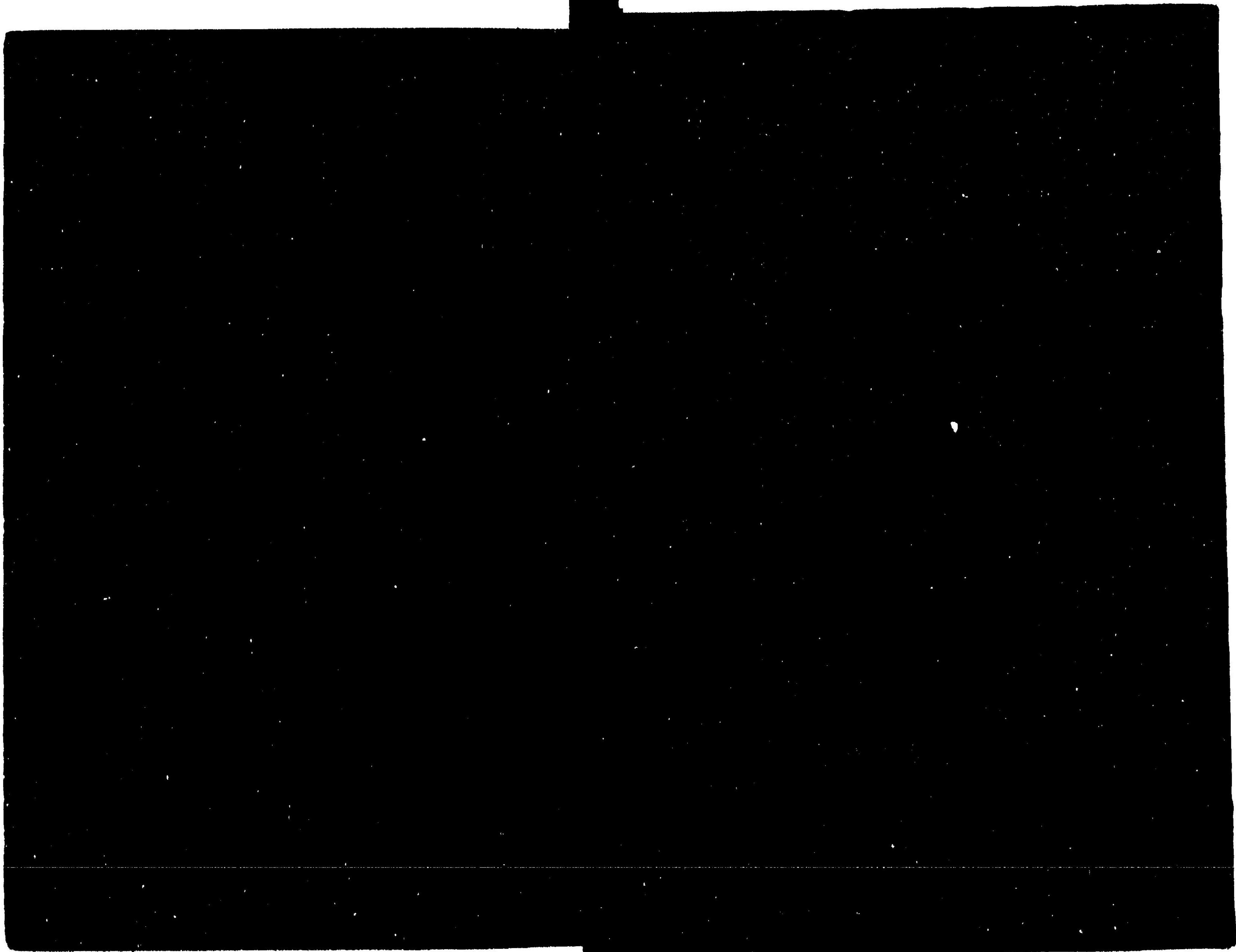
魔宮殿見聞記

吉田 博/著

M43

ADF-0043





328

208

